

テーマ：東アジアの《易》学の潮流と文化的異色性

第12回ワンアジア財団国際講座は香港教育大学教授の鄭吉雄先生がご担当なさった。鄭先生は国立台湾大学中国文学研究専攻の博士で、かつて台湾大学中国語文学科の教授、香港教育大学副学長（カリキュラム発展担当）を歴任され、現在は香港教育大学文化歴史講座教授である。鄭先生のご専門は中国及び東アジアの儒教経典解釈学、中国思想史、『周易』である。本講座の重点は以下の通りである。

鄭先生は先ず地域研究（area studies）の世界的な潮流を提示し、この地域研究の一環として、東アジアは現在の研究の中心であって、それが「変動する東アジア」という意味であり、注目に値する、と述べた。当学期のシリーズ講座において、アジア共同体の検討もまた地域研究という概念の一つである。受講生たちに更に多元的な観点を与えるために、先生は東アジアを分析するために今日の欧米の観点を付加なさった。これに対して、地域研究が持つ歴史は、ここ10年ほどの間に発展し、イギリスの研究学問領域の中で、地域研究は2020年から正式な一つの研究領域となり、今後は重要な領域となると予測され、オランダのライデン大学（Leiden University）では2010年に既にライデン大学地域研究院（LIAS；The Leiden University Institute for Area Studies）が発足している。

アジアの内部意識の形成は夙に19世紀末に福沢諭吉（1835-1901）が「脱亜論」を提示し、これは依然として現代の「東アジア」イメージの中に暗示されている。欧米の学会では17世紀以来のグローバルな視野の中で「遠東」イメージを受け入れ、100年を経た植民地の歴史を以て、20世紀中葉には成熟した「東アジア」イメージに発展した。ただし、東アジア内部と東アジア外部とでは措定される「東アジア」イメージの背景が大きく異なる。東アジア地域イメージ形成の際には、我々が発見する包括的な地域に中・日・韓・ベトナム等の地域が含まれ、その中のすべてに『周易』文化の影響の痕跡が見られる。

そこで、鄭先生は『周易』とは何か、と問い掛けた。『周易』とは、一部またはグローバルに遍在する中国儒教の典籍であり、同時に、日本・韓国の歴史では伝統的に重視されてきた。例えば、日本の歴代天皇の元号は少なからず『周易』が参照され、「令和」以前の元号は実に25回も『周易』を出典としている。周知の通り、韓国の国旗の中には「乾坤坎離」の四つの卦が四方に位置している。『周易』には一部または全体に哲学生徒宗教性を具えた経典であり、その文献内容は主として「卦、爻、經、傳」を以て構成されており、神道の精神を展示し、神聖性を具有し、神秘性も兼ね備えている。更に事前科学的な内容もあり、異なる地域・歴史・文化の人々を誘い込む価値を持っている。

中国では『周易』は盛んに研究され、およそ挙げられる卜占・科

学・出土した文献・運命・哲学・象徴などあらゆる研究の対象となっており、学術・民俗等の各方面を対象化しており、生活・文化と密接に関係し、複数の領域に跨る価値を持っている。中国経典学では日本に伝播した後、『周易』はその他の儒家経典に比べて、卜占活動に用いられ、運命・生死・禍福・哲理等に及んで、注目され、且つ歓迎された。『周易』が日本に伝来した時期はおそらく6世紀以前だが、日本での「易」学の研究はあまり知られておらず、ただし確実に言えるのはだいぶ時間を経た徳川時代に『周易』の学問は成立した。

鄭先生は最後に、『周易』が東アジアに与えた影響を広く概観し、次のように示した。先ず中・日・韓では受容が異なり、近代から現代においても異なる運命に臨んだ。社会・文化・風俗等の方面でも『周易』は中国の経典の源流となり、中国大陸と台湾での影響が比較的大きいのは疑うべくもない。日本と韓国では『周易』文献や哲学等の研究は継続されており、社会・文化の影響は比較的に男女関係や家庭の倫理等の方面に限られる。陰陽哲学の反映は日中韓の3地域でまた異なる。陰陽哲学の暦法への体現も中日で大きく異なる、と述べられた。

(ウェブサイト：<https://oneasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(原稿作成：蔡珮菁・日文系副教授)

(翻訳：齋藤正志・日文系副教授)